

8月1日 年間第18主日

コヘ 1:2, 2:21～23 コロ 3:1～11 ルカ 12:13～21

1. ルカ

w.13-14 「群衆の一人が言った。“先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。” イエスはその人に言われた。“だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。”」

明らかにこれは、出 2:14 で同胞がモーセに吐いた抗議の言葉を裏返して使った言い回しです。「モーセが、“どうして自分の仲間を殴るのか”と悪い方をたしなめると、“だれがお前を我々の監督や裁判官にしたのか。お前はあのエジプト人を殺したように、このわたしを殺すつもりか”と言い返したので……。」

我が国の一部のキリスト者たちが、地方自治体を裁判に訴えた、地鎮祭での神道の祭事に関する違憲訴訟を、多くの普通の日本人はキリスト教の出しゃばりないし過干渉と見なしたように、世界的に見てもいろいろな宗教の、特に原理主義者たちによる社会や政治への関与を、ほとんどの普通人は“やっかいな困り事”と思っています。ところが見方を変えると、世の中の不公平やいろいろの争いに“否”を突きつけて、出来れば少しでもこれを改善することこそが、宗教の使命だという主張を、私たちは身近に聞くことが多いのです。それでは聖書が語るキリストの福音からは、私たちはどんな指針を聞くことができるのでしょうか。

v.15 「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」

最も危険な誤解は、キリスト教の信仰と救いは地上的なものではなくて、精神の世界の事柄だという解釈です。具体的な実生活と心の中の信仰とを切り離す人は、“聖書も神の力も知らない人”(マタ 22:29)だと言わなければなりません。人はだれでもその人生の旅路で、金持ちにも貧乏にもなる可能性を持っているように、同時に、しかもそれとは無関係に、神の前に豊かになったりならなかったりする(v.21)可能性を与えられているのです。問題は、「あなたの富のあるところに、あなたの心もある」(マタ 6:21)ということです。あなたの人生にとって、イエス・キリストの福音とその救いは、如何ほどのものですか。それが今、問われているのです。

2. コロ

v.4 「あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」

使徒たちはその宣教の過程で、救われた人々が「真の知識に達する」(v.10)ことの大切さを、切々と訴えました(1:23、エフェ 1:18、1コリ 1:5)。この知識を得るのに人種や身分の区別はなく、キリストがすべてであると教えました(v.11)。

すでに半世紀以上にもわたって“平和ボケ”してしまっている日本人には驚きかもしれませんが、私のインターネットサイトで現在、ニューオールリンズの町での葬儀行進の動画を紹介しています。アメリカの多数

の若者たちが軍人として、世界の安全と平和のために各地に派遣され、その結果として当然、故郷でしばしば戦死者を葬るという事態を決して避けることが出来ない現実を、キリストの福音の光に照らして見せてくれるのです。 Oh, when the saints go marching in 「おお、聖なる者たちが(神の国に)凱旋するとき、おお、聖なる者たちが(神の国に)凱旋するとき、主よ、私もその数の中に入れてください。聖なる者たちが(神の国に)凱旋するとき。」 このゴスペルソングの歌詞が、ニューオーリンズの町の人々にとってどれほど切実な希望であり祈りであるかを、あなたは理解する信仰と(真の)知識を持っていますか？

3. コへ

冗談とも本音ともとれる、よく耳にする言葉に、“お金を貯めていても墓まで持って行けるわけでもなし、生きているうちに、使って楽しまなければ……” というのがあります。いくら苦勞して人生を送っても、その結果を他人に残すだけなのだから空しい(2:18)というのが、今朝のテキストの主旨です。

これは一面の真理に過ぎないかもしれませんが、事実たいていの人間は貪欲であるのが常なので、確かに聞かせるに値する言葉ではあります。しかし聖書が、「貪欲は偶像礼拝に他ならない」(コロ3:5)と述べているのは、単に“空しい”という以上のことなのです。

「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者は……」(ルカ12:21)という福音書の言葉を、私たちは正しく理解したいと願います。なぜなら私たちの(永遠の)命は、キリストと共に神の内に隠されているからです。「あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」(コロ3:4) どうか神が、私たちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいますように(II コリ4:6、エフェ1:18)。

ハレルヤ、アーメン。

8月8日 年間第19主日

知 18:6〜9 ヘブ 11:1-2, 8-19 ルカ 12:32〜48

1. ルカ

v.32 「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」

主イエスの御業……それは復活されたイエスによって聖霊を通して今も続けられている……は、神の国を受け継ぐ聖なる民を育てることであると(1テサ 5:23-24)、カトリック教会は信じています。「教会、すなわち、秘義としてすでに現存するキリストの国は、神の力によって、世界において可視的に成長する。」(教会憲章3) それは、「この国(神の国)の地上における芽生えと開始となっている」(同5)けれども、私たちキリスト者は今なお、その御国を受け継ぐ日を「辛抱強く待っているのです。」(ロマ 8:25/フランシスコ会訳)

ルカ福音書のテキストでは、私たち信者を「僕」(v.37-8)、「家の主人」(v.39)、「管理人」(v.42)と、いろいろな言葉で表現しています。私たちの信仰生活は、主キリストの僕として自らに委ねられた人生を管理することだからです。僕として忠実であったか(v.42)、それとも不忠実な者であったか(v.46)が、神の国では問われることになります。

主人の帰りを、真夜中に目を覚まして待っている僕のように、「わたしは主を待ち望む。」(イザ 8:17) 「その日、その時は、だれも知らない。」(マコ 13:32) 尋ねられたなら、「夜明けは近づいている。しかしまだ夜なのだ」(イザ 21:12)と答えるしかありません。そうであればこそ、「尽きることのない(実際は私たちのささやかな)富を天に積みなさい。」(v.33) 私たちが受け継ぐ国は、「キリストの計り知れない富」(エフェ 3:8)だからです。

2. ヘブ

v.1 「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」

先週も紹介した“*Oh, when the saints go marching in*”の歌詞の続きには、“悩み多きこの世が、我々の人生のすべてだとある人たちは言う”とあります。神の国は“(信仰の)外の世界の人たち”には理解出来ないからです。それに対して教会では、「信仰による義について」(ロマ 10:6)語ります。私たちキリスト者は、「多くの証人に雲のように囲まれている」(ヘブ 12:1/フランシスコ会訳)のです。

v.13 「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。」

今なおその影響の名残が一部のカトリックの司祭や修道者にも見られる“社会的福音”について、ここ

で言及しておくことが良さそうです。19世紀に始まって、特にアメリカで盛んになった“社会の神の国化”という精神で、その合い言葉は“神の国を建設する”というものでした。キリストによる贖いよりも、社会的改革を重視するこの精神は、二つの世界大戦を経て鋭く批判され急速に衰えたとはいえ、今でも一部のキリスト者は、聞かされた経験があるに違いありません。

1947年に ヴィサー・トフト が著した“キリストの王権”は、今なお私たちにとって大いに有益な書物であり、またカトリック教会ではすでに1925年以来、年間最後の主日を“王であるキリストの祭日”にして来たことは注目に値します。

3. 知

出エジプト記12章に述べられている過越の夜の出来事を、「昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました」(ヘブ11:2)という視点で詠じたこの歌は、“(信仰の)外の世界の人たち”には決して理解出来ないものです。昔のイスラエルはそんなに宗教的に一枚岩だったのだろうか。実際の彼らは「頑なな民」(申9:6)だったのではないのか。

私たちの知っているカトリック教会も、「自分のふところに罪人を抱いている」(教会憲章8)と述べられている通り、実際には「頑なな民」、不満を言う「多くの寄り集まり人」(民11:4/口語訳)です。この現実を、だれも否定することは出来ません。しかし感謝しましょう。「あなたがた(教会)はもはや自分自身のものではないのです。あなたがた(教会)は、代価を払って買い取られたのです。」(Iコリ6:19-20) ですからミサの交わりの儀で、教会に連なる私たち一人一人は祈ります。「わたしたちの罪ではなく教会の信仰を顧み、おことばの通り教会に平和と一致をお与えください。」

教会が、キリストにあって、神の国を受け継ぐ聖なる民であることを感謝出来る人は幸いです。

ハレルヤ、アーメン。

8月15日 聖母の被昇天

黙 11:19～12:10 | コリ 15:20～27a ルカ 1:39～56

1. ルカ

v.47-48 「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者と言うでしょう。」

「はしため」と訳されている言葉は、キリストが「僕の身分になり」(フィリ2:7)と述べられている“僕(δούλος)”の女性形(δούλη)であって、そのはしための“卑しさ(ταπεινώσις)”(フランシスコ会訳)とは、新共同訳におけるように“身分の低い”というような意味です。

ルカ福音書が述べているのは、マリアの信仰の従順と(1:38)、彼女が“神の母(θεοτόκος)”になる“役割と尊厳を授けられた”(教会憲章 53)ことへの“マリアの賛歌”です。やがて2世紀以降、教会の中には神の母聖マリアへの“特別な崇敬”(教会憲章 66)が語られるようになり、以降カトリック教会は今日に至るまで、一貫してこれを大切にしてきました。

よく知られているように、プロテスタントの人々は“カトリック教会はマリアを礼拝している”と非難しますが、それは実は無知による全くの誤解です(教会憲章 66 参照)。しかし同時に、通俗的なカトリック信仰の中にある“偽りの誇張と過度の心の狭さ”(教会憲章 67)を、私たちは謙虚に反省しなければなりません。

私たちはマリアの祭日を祝うたびに、マリアを“神の母(θεοτόκος)”と呼んで敬い、祝います。そのとき忘れてはならないことは、いかにマリアを崇敬しても、キリストを救い主なる神と信じなければ、この呼称は成り立たないということです(教会憲章 60,62 参照)。

カトリック教会は、聖書の時代よりも後になって顕著になって来た“聖母マリアへの崇敬”が、冷静に考えれば“少しも不思議ではない、…… 正当である”(教会憲章 56)ことと、この崇敬が教父たちの時代以降“教会の中に常に存在した”(教会憲章 66)という事実を承認し、これに賛同しているのです。

2. コリ

v.20 「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂とされました。」

キリストはその十字架の死と復活を通して、“罪と死と悪魔の支配”に勝利されました。私たちは救われて、「キリストによって生かされることになる」(v.22)と信じているのです。そうです。キリストは私たち、“やがて神の国に凱旋する人々”の初穂として、死者の中から復活されました。

そのような、神の国を待ち望んでいる私たち教会の中で、神の母聖マリアはいわば信者たちの母として“救われるべきすべての人と結ばれている”(教会憲章 53)のです。今朝の叙唱の中の“教会の初穂”という言葉は、そのように理解すべきでしょう。ですから私たちは聖マリアと心を一つにして、「わたしたちの主イ

エス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう」(15:57)ではありませんか。

3. 黙

教会は神の母聖マリアと心を一つにして、「神の救いと力と支配が現れ」(v.10)る日を、ひたすら待望しています。そのような歴史の教会を励ますために、黙示録の記述の中のここ彼処が果たして来た役割を理解しましょう。BC.587年のエルサレム神殿崩壊と共に行方知れずになっていた契約の箱が、メシアの到来の日には再び現れるというユダヤ教の伝承が、神の国の希望の象徴として用いられています (v.19)。その他のいろいろな伝承も、このような希望の象徴として用いられているのであって、個々の字句にあまり拘りすぎないことが大切です。

「この世の国は、我らの主と、そのメシアのものとなった。主は世々限りなく統治される。」(11:15) 来るべきその日を教会は忍耐して待ち望んでいるのだ(ロマ 8:25)ということ、カトリックの子らは決して忘れてはなりません。「召されて聖なる者とされた」(ロマ 1:7、1コリ 1:2 他)私たちは、確かに使徒継承によって福音を正しく教えられ、「御子にこの望みをかけている」(1ヨハ 3:3)のですから。

ハレルヤ、アーメン。

8月22日 年間第21主日

イザ 66:18～21 ヘブ 12:5～13 ルカ 13:22～30

1. ルカ

ニケア・コンスタンチノーブル信条によって、私たちは代々の教会と共に次のように宣言します。「主は、生者と死者を裁くために、栄光のうちに再び来られます。……わたしは、聖なる、普遍の、使徒的、唯一の教会を信じます。罪のゆるしをもたらす唯一の洗礼を認め、死者の復活と来世のいのちを待ち望みます。アーメン。」

カトリック教会がこのように教えるのは、復活の主から委ねられた宣教命令によるのであり、「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」(ヘブ 9:12)キリストの救いの御業に基づいていることを、再確認しましょう。イエスの教えられた数々の話を、この神の国の希望から切り離して理解してはなりません。“狭い戸口”(v.24)の警え話も同様です。

カトリック信者として生活したり活動するということと、神の国の福音を聞いているということが、しばしば同じではないという現実気づくことを、主は今朝の福音書のテキストを通して教えておられます。家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまう前にしなければならないこと、それが「狭い戸口から入る」ことだと言われているのに、神の国の希望(コロ 1:5,23, 3:4 参照)にはまるで無関心なカトリック信者が、実際多いからです。善良なカトリック信者としてミサをささげ、人並みの奉仕や活動に参加して来たけれども、「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ 1:16)である福音を聞くという“狭い戸口”から入ることはしなかったという悲惨な結末を、警戒しようではありませんか。

今日の日本では、自ら学ぶという能力を備えることなしに大学に進学する人たちが多くなって、まるで大学の實力とは、そういう未熟な連中のお守り役を無事にこなすことのように言われる傾向があります。そんな甘えの構造が、私たちの教会をも蝕んではいけないでしょうか。「実に、信仰は聞くことにより、キリストの言葉を聞くことによって始まる」(ロマ 10:17)と書かれている“聞くこと”も、“狭い戸口から入る”ということと同様に、信者が自ら自発的に、自ら努力して行動することです。しかし、そのような自覚の伴わない“滅びに通じる門”(マタ 7:13)は、実際広いのです。

2. ヘブ

“主の鍛錬”(v.5)という言葉を取り上げるとき、私たちはこのテキストの前後関係から切り離さないように注意しましょう。まず、私たち信者を取り囲んでいる“おびたしい証人の群れ”(12:1)とは、旧約聖書に登場する救済史上の人物たちです。彼らについての数々の伝承を、キリストの福音の証人たちの話として聞くことが、ここでは求められています。旧約聖書に対するそのような姿勢は、“信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら”(12:2)聞くことによって、可能になります。これも実際には、信者が自ら自発

的に、自ら努力して取り組まなければならない課題です。

すでに久しく我が国では、家庭で父親が子供を教育したり鍛錬するということがない時代になってしまいました。今日では信仰の世界も同じで、特殊な鍛錬を行うカルト集団を別にすれば、教会が組織的に、あるいは制度として信者を鍛錬することは、通常ありません。

主の鍛錬は、特に聖書を通して、いわば私たちが自ら志願して受けるものであって、それ以外の人間の鍛錬とは別のものです。慈善の業や数々の奉仕も、学問や各種の修練も、それぞれ意味のあることに違いありませんが、主の鍛錬とは別物です。手引きしてくれる人や書物が要らないわけではありませんが、それに先だってまず自分で聖書を読んでいることが必須です(使 8:28-31)。そうすれば、霊の父は私たちに鍛えてくださいます(12:10)。

3. イザ

ユダヤ教が、“すべての言葉の民を集める”(v.18)伝道宗教になって行った後の時代を反映する挿入が、第三イザヤ(イザ 56-66 章)にはいくつか見られます。その伝道を説明して、「彼らはわたしの栄光を国々に伝える」(v.19)と語りました。

私たちも、聖書を通して使徒たちの宣教に耳を傾けます。使徒パウロは述べています。「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたち(使徒たち)の心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。」(II コリ 4:6) 聖書を通してこの使徒たちの宣教を聞くことが出来るために、どうか主が私たち一人一人に、“狭い戸口から入る”導きを与えてくださいますように。

ハレルヤ、アーメン。

8月29日 年間第22主日

シラ 3:17-18,20,28-29 ヘブ 12:18~24 ルカ 14:1,7-14

1. ルカ

v.11 「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

一見たいへん分かり易い教訓のように見える言葉こそ、実際には教会の中で適切に説明されたり理解されることが少ないという慣例が、今朝の福音朗読にも当てはまります。なぜなら今朝のテキストは、これをキリストの福音からも私たち一人一人の救いからも切り離して、いわゆる一般道徳として通用するように見えるからです。

しかし神は私たちに、今朝このテキストを通してキリストの贖いと救いの福音を語っておられるのですから、それを聞き取ることこそが、共にミサをささげる主の民の課題なのです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハ 3:16)、「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」(ヨハ 4:10)、「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(ロマ 5:8)。このことによって私たちキリスト者は「神の奴隷」(ロマ 6:22)「キリストの奴隷」(コリ 7:22)「神の僕」(ペト 2:16)となりました。ですから私たち一人一人にはいろいろな“務め”が与えられていますが(コリ 12:4-11)、それは“奴隷の務め”であって、もはや賃金や報償を得るような種類の働きではないのです(17:7-10)。

この“奴隷の務め”の特性が“謙遜と柔和”(エフェ 4:2、コロ 3:12)であって、それは神の無償の恵み(ロマ 3:24、エフェ 2:8)に動機づけられているのです。ですから私たちは、決してこれを自分の美德として誇ってはなりません。イエス・キリストによる贖いと罪の赦しの恵みに対して“高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる”からです。

婚宴の上席を選ぶ客を非難することが、この話の目的だと思っはなりません。私たちは、この世においては名誉や地位、誇りや称賛が大きな価値であることを、安易に否定すべきではないでしょう。キリスト教の倫理の目的は、(信仰とは無関係な)見かけ上の善人や偽善者を育てることではありません。“外部の人々を裁くこと”は、教会の務めではないからです(コリ 5:12-13)。

2. ヘブ

我が国における典礼刷新のいわば教科書として用いられて来た「ミサがわかる」(土屋吉正著)は、その目次を見ると“典礼は神奉仕”(第一章)“典礼は祭司の民の奉仕”(第二章)“会衆は奉仕する祭司の民”(第三章)……と、“祭司の民”という概念を強調しています。新約聖書は祭司という言葉教会共同体に当

てはめて言っていますが(1ペト 2:9、黙 1:6)、それは教会が“ミサの祭儀(いけにえ)”によって、祭司の民の奉仕をささげる共同体だからです(13:15、フィリ 2:17)。

私たちキリスト者共同体にとって、神に近づくことは燃える火と黒雲のシナイ山における時のようではなく(出 19 章)、今や私たちは“この御子において、その血によって贖われ、罪を赦された”(エフェ 1:7)民として、「生ける神の都、天のエルサレム」(v.22)に近づいていけにえをささげるのです。祭司の民にとって“へりくだる”とは、「恐れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていく」(12:28)ことに外なりません。

3. シラ

便宜上“知恵文学”という名で分類されている諸文書には、神の知恵からこの世の教訓や処世術に至るまで広い範囲の教えが、かなり雑然と集められている印象を受けます。一面では、どんな思想や立場に立つ人でも、何らかの役に立つ教えをそこから引き出すことが出来るのですが、教会は一貫して、これをキリストの光に照らして読むことをして来ました(II コリ 3:12-18 参照)。

ですから、イエス・キリストへの信仰も福音の知識もなしに旧約聖書を読む人と、主日のミサの朗読配分によって今朝の日課を学ぶ私たちとでは、その理解の仕方に大きな違いがあるのは当然のことです。私たちは今朝、「キリストの奴隷」とされて“奴隷の務め”を与えられたことを光栄とし、“へりくだる”ことと“柔和である”ことの意味を理解しましょう。私たちに語っておられる方はキリストだからです。「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

ハレルヤ、アーメン。